

日本書道史

第10講 「和様書道と唐様書道」

住川 英明 (岐阜女子大学)

第10講 「和様書道と唐様書道」

【学習到達目標】

- 唐様書道において、真跡を重視する考え方と法帖を重視する考え方が存在したことを、概括的に説明することができる。

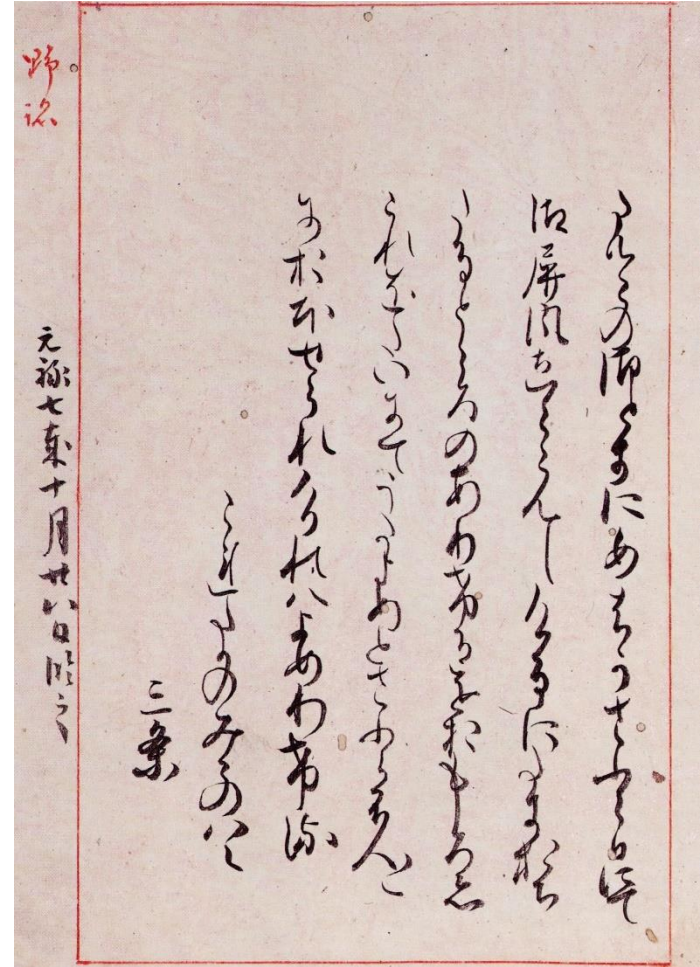
第10講 「和様書道と唐様書道」

1. 和様書道と書の大衆化

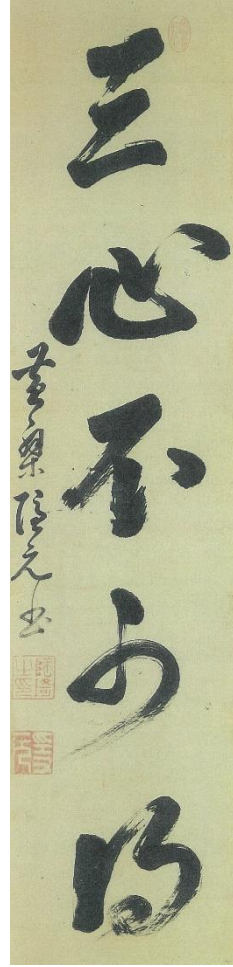
- 江戸時代において、書の主流を形成していたのは和様書道であった。
- 近衛家熙は、上代様がほとんど注目されていなかったこの時期に、復古的な学書法を取り入れていた。
- 唐様書道が一般に行き渡る大きな契機となったのは、黄檗山万福寺における隠元隆琦、木庵性瑫、即非如一らの布教活動であった。
- 独立性易が、門下の高玄岱・高配斎や北島雪山に明の書風を伝え、雪山はそれを江戸の門人細井広沢に伝えた。

第10講 「和様書道と唐様書道」

近衛家熙《本阿弥切写》



隠元隆琦《一行書》



木庵性瑫《一行書》



第10講 「和様書道と唐様書道」

2. 唐様書の流行と書論における実証主義の萌芽

- 細井広沢は、文徵明の書風を能くし、合わせて『觀鵞百譚』などの書論書を出版した。このことによって、唐様書道が広く流行することになった。
- 王羲之の書法を信奉する唐様書家は、肉筆・真跡を重視する「元・明派」と、法帖（石摺）を重視する「晋・唐派」とに分かれて所説を展開した。

第10講 「和様書道と唐様書道」

2. 唐様書の流行と書論における実証主義の萌芽

- 其最可鄙笑者。米趙諸公之卷軸。文祝二家之墨蹟多出。好事家贗作。却認為真刻板行之。諸先生題跋數首。以為難得之寶。（沢田東江『法書復古編』）
- 墨本ト云物ハ先ヅ真蹟を双鈎シテ上石刻木。段々伝フル内ニ真蹟ニハ大ニ違ヒ。其ノ上運筆ノ跡見ヘズ。死物ノヌケガラヲ摸シテヌリチラス。（細井九臯『墨道私言』）

第10講 「和様書道と唐様書道」

2. 唐様書の流行と書論における実証主義の萌芽

- 文字八元と中華の物なれば。中華の法に従ひて教ゆべきことなり。剰今の俗唐様倭様と別ていへること。文盲の第一也。道風。佐理。行成。其外古への諸賢八。皆晋唐の書の如くにして。中華人も。日本書八二王の筆跡のごとしと称せり。（藤堂龍山『学書弁』）
- 江戸時代中・後期においては、書に対する実証主義的なものの見方が、徐々に拡がり、深まっていった。

課題

1. 真跡を重視する考え方と法帖を重視する考え方の両方の立場から、それぞれの所説をまとめなさい。

第10講 「和様書道と唐様書道」

【学習到達目標】

- 唐様書道において、真跡を重視する考え方と法帖を重視する考え方が存在したことを、概括的に説明することができる。

日本書道史

第10講「和様書道と唐様書道」

住川 英明 (岐阜女子大学)